

# 野口廃寺 (A～D地区)

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター  
発行 各務原市教育委員会  
TEL (0583)83-1123  
平成17年3月



写真1 A地区発掘調査空中写真



写真2 須恵器の墨書「寺」

## 野口廃寺とは

野口廃寺は、各務原市蘇原新栄町2丁目地内に所在します。大正年間に、古代の瓦や須恵器が多く出土する遺跡として研究者の目にとまりました。古代の瓦は、寺院建築物に用いられることが多いため、この遺跡は古代の寺があった場所だと推定されています。

野口廃寺では、平成3年度にマンション建設をきっかけとして初めての発掘調査を行い、その場所をA地区と命名しました。続いて平成7年度にB地区とC地区、平成8年度にD地区を緊急発掘調査しました。

ところで、野口廃寺の実際の寺名については不明です。旧村名の「野口」を使って、「野口にあったが今は無くなってしまったお寺」という意味で野口廃寺の名称を使っています。

野口廃寺の発掘調査では、多くの瓦や須恵器、そして柱や溝の跡が発見されました。発掘調査の面積は、今のところ、それほど多くはありませんが、4地区の調査によって野口廃寺の姿が何となくわかってきた段階です。

## 蘇原に集中する古代寺院

各務原市のほぼ中央部に位置する蘇原には、瓦を多く出土する遺跡が目立ちます。図1に示した通り、南北2.2km、東西0.8kmの範囲に遺跡が分布しています。これら全てが古代寺院だとすると、大変に珍しい事例であり、また興味深いことです。

図1は、明治43年の測量図を基にしています。昔の地形が、大変よくわかります。どの遺跡も各務原台地高位面から北西に延びた半島のような高い場所に、あたかも空間を分かち合って占有するかのよう分布していることが理解されます。

一般に、美濃地方における寺院建立のきっかけは、壬申の乱(672年)の時、大海人皇子おあまのおうじに味方して勝利を納めた豪族達の手柄であると言われています。当時の最先端文化の象徴であった寺の造営を認められ、奈良から寺院建築の専門家が地方へ派遣されてきたのだと考えられています。

蘇原の寺院推定地は、見晴しのよい地形に建てられた、古代各務郡の豪族達のシンボルであった遺跡だと考えられます。野口廃寺は、それらの中の一つであったと言えます。



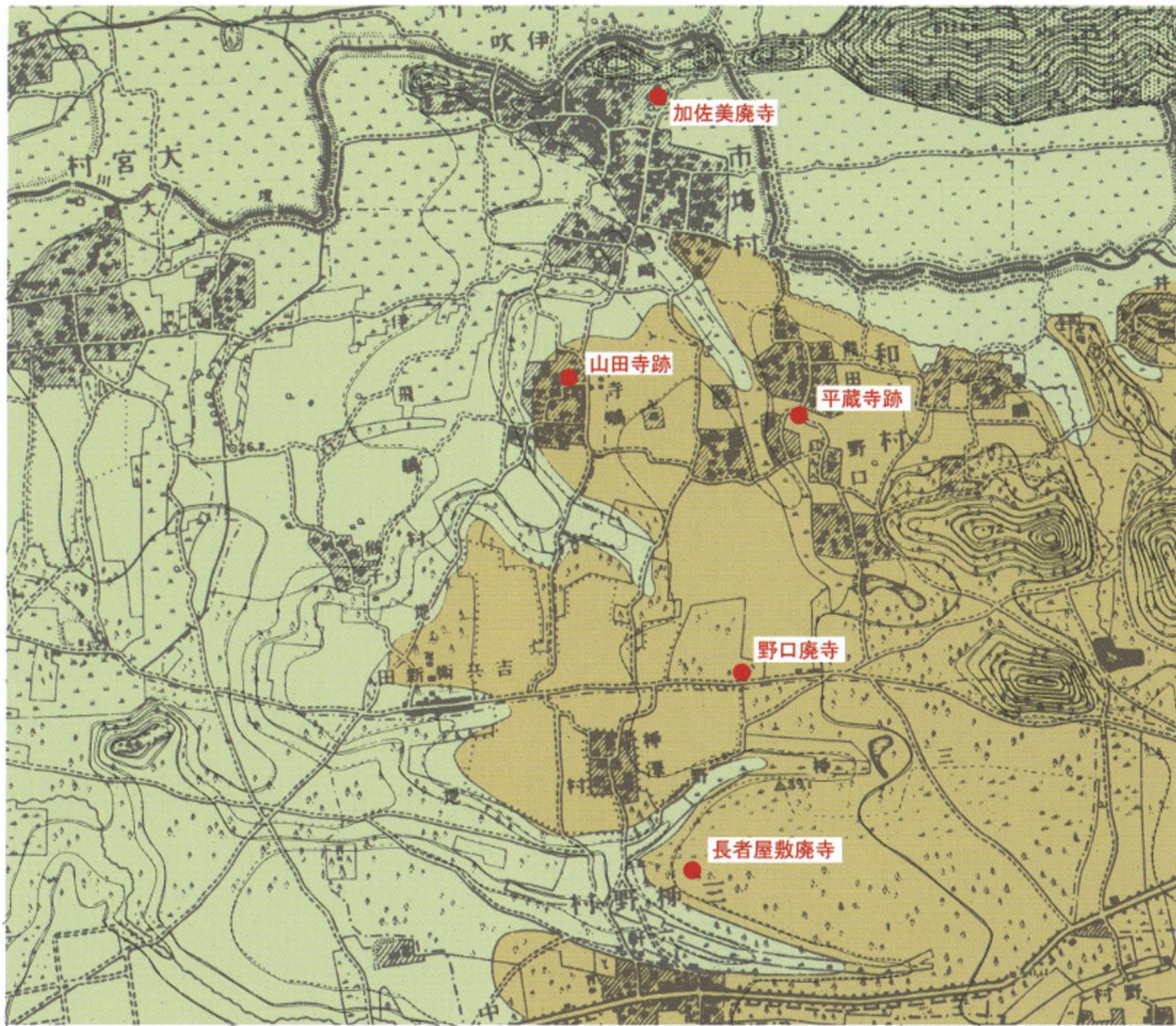


図1 蘇原地域の古代寺院推定遺跡 (1/20,000)

## 発掘された遺構

遺跡内から検出された遺構には、大型の柱穴が目立ちます。そして、それらが等間隔に真っ直ぐ並んでいる状況が明らかになりました。

柱穴の配列を結ぶと、上に建てられていた掘立ほったて柱建物が推定できます。図2の通り、1～7号の建物が復元されます。全面を発掘したわけではありませんので、あくまでも推定に留まります。

注目すべきことは、これらの建物が整然と並んでいることです。その方向は、磁北を基準にしているようです。つまり、きちんとした設計に基づいて建築されたということになります。また、6号建物の北側の柱列では、柱を立て直した痕跡があります。柱の腐蝕により建物を修理したわけですが、このことは建物の長期的な維持管理を裏付けるものです。

次に溝についてですが、1号溝とSD1と称したのを見ると、遺跡内を四角形に囲う区画溝があったことを推定できます。西側の1号溝の埋土には、多くの遺物とともに焼けた土や炭が多く堆積していました。どうやら、内側の建物施設は、最

後に火災によって焼失した可能性があります。

それでは、寺に関する遺構はどうでしょうか。掘立柱建物は、寺院施設ではないと考えられます。寺院は、柱を土に埋めるのではなく礎石そせきの上に柱を据える工法がとられていたと思われるからです。A地区では、先ほどの溝とは別の周溝状遺構が検出されました。これは、文字通り何かを囲む溝だと考えられます。調査の分析では、土を盛り上げて造った基壇きだんを区画する溝であると考えられました。その基壇の上にこそ、礎石を用いた何らかの寺院建物が存在した可能性が高いと思われます。実際、瓦が出土したのも、この周辺が最も多いことがわかっています。

また、金堂や講堂のような大型建物の屋根に乗せる鴟尾瓦しびの破片(写真3・図3)が出土していることから、この辺りに寺院施設があったことはほぼ確実です。

その他、梵鐘ぼんしょうを製作したのではないかとと思われる鑄造遺構ちゅうぞうが発見されています。寺という機能に関する遺構として、非常に重要であると思われます。



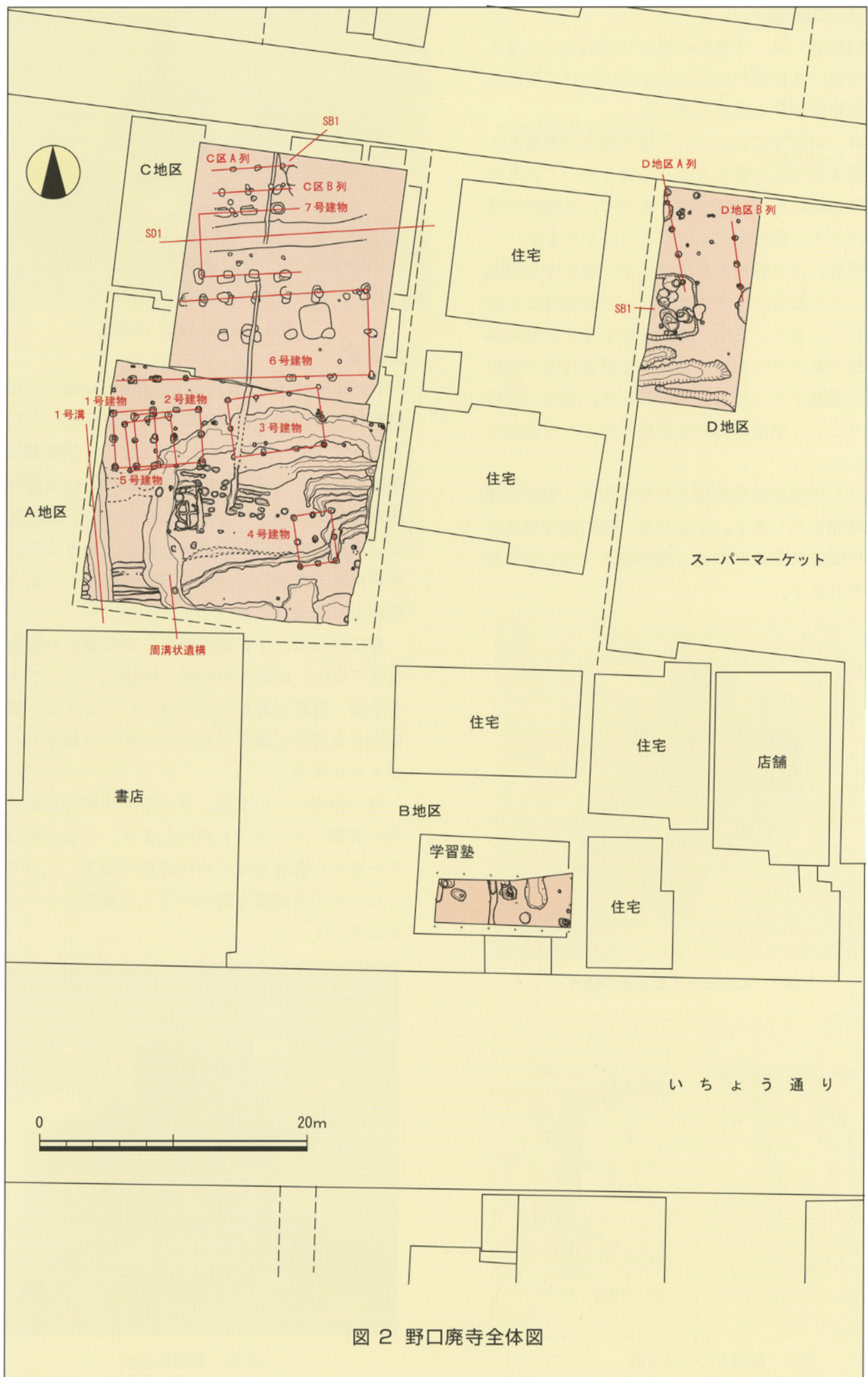


図 2 野口廃寺全体図



## 出土した遺物

野口廃寺では、7世紀の終わり頃のものと考えられる瓦、8世紀の初めから中頃にかけて使用された須恵器が多く出土しました。

瓦は、川原寺式と呼ばれるふくべんれんげ もんのきまるがわら複弁蓮華文軒丸瓦としじゅう こ もんのきひらがわら四重弧文軒平瓦を特徴とする一群です。これらの瓦は建築時に葺かれたものですので、瓦型式の所属年代が寺の創建年代ということになります。

須恵器には各器種がありますが、なかでも写真2のような墨書で「寺」と書かれた無台坏などが含まれています。また、写真4のような大型の鉢や水瓶がありますが、このような器種は寺で使用された道具であったと考えられます。また、硯の代わりとして須恵器の坏を利用したものも確認されました。

これらの須恵器が使用された年代は、寺が存続した期間を示します。すなわち、野口廃寺は8世紀の中頃まで営まれた後、廃寺になったという解釈になります。



写真3 C地区出土鴟尾瓦の破片

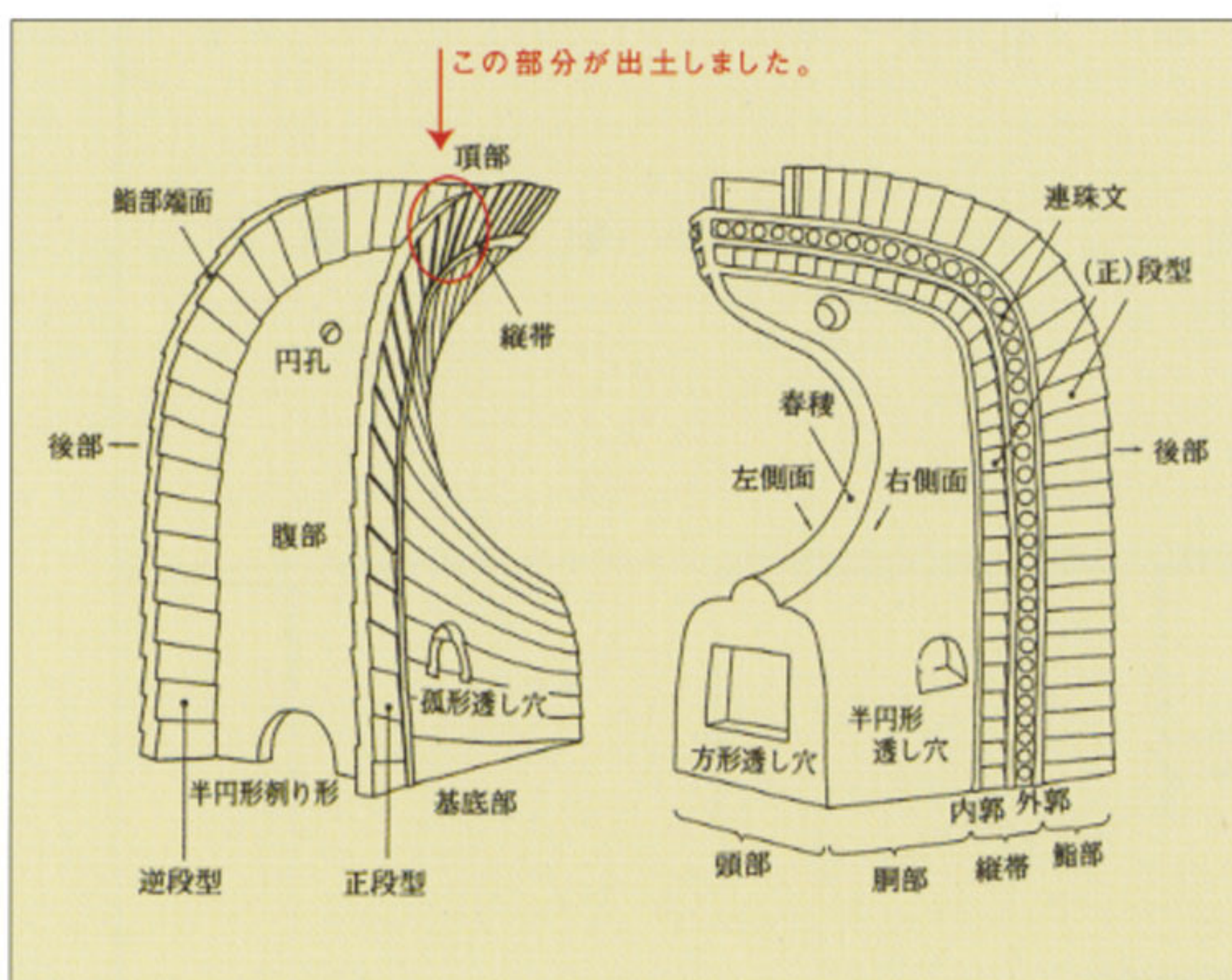


図3 鴟尾瓦の部位名称



写真4 出土遺物 (D地区)

## まとめ

野口廃寺について現時点でわかっていることは、整然と並んだ掘立柱建物群の中に寺院建物が存在したのではないかとことです。この建物群は、規模や構造から見て、古代各務郡における郡衙の関連施設を想像させます。したがって、野口廃寺は、本格的な伽藍配置をもつ寺院というより、郡衙の中に寺院施設の一部を取り込んでいたような遺跡だと考えられるのです。

野口廃寺は、7世紀の終わるか8世紀の初め頃に建てられ、8世紀の中頃には消滅したようです。その時、蘇原寺島町の山田寺というような、規模の大きな寺院に統合されたことが、可能性として考えられます。

野口廃寺については、まだ不明な部分が多く、別の解釈も成り立つと思われます。今後、野口廃寺を含めた蘇原地域の古代寺院を調査していくことは、古代各務郡を研究する上で重要なテーマであるでしょう。



写真5 周辺の現状